

言葉の意味

中邑賢龍

「陶器と磁器の違いが分かるか？」と子供に尋ねると、知っていると答える子がいる。しかし、その知識は「陶器は粘土で磁器は石が材料」と言った程度で、実際に触って分かる、見て分かるというリアリティのある知識レベルに達していない子供が多い。受験のためにはこれだけ知っていれば良いというレベルで知識が止まっている。

障害のある子供を担当する先生に「その子供が好きな飲み物は分かっていますか？」と尋ねると、「多分お茶では?」、「よく分からない」と言った答えが返ってくることもある。それでも日々の授業は進んでいく。子供の認知レベルを十分理解してなくても障害が重度であれば IQ に応じた教授法や実践マニュアルがあるので困ることはない。言葉のない子供たちを理解することは難しく、時間がかかる。そこでマニュアル化し、誰もが簡単にある程度の教育ができるようにすることも理解できる。しかし、そもそも IQ で子供の能力を括り教授法を当てはめていくのは無理がある。残念ながら特別支援教育の現場では子供を理解する

技術は心理検査が中心となっており、コミュニケーションを通じたリアリティある子供の実態把握は遅れている。

魔法の言葉プロジェクトでは、毎年テーマを設定し、そのテーマに沿った実践の中で議論ができればと考えてるが、そこに参加した人のどれだけの人がそのテーマの意味を考えながら実践したであろうか。実践報告をみると目の前の子供の困り感に対してどのように利用するかという実践が大半を占める。タブレットを使えば、障害が重度でもとにかく能動的活動が引き出せ、子供が発達するに違いないと言った図式が出来上がっているのかもしれない。しかし、今後はそういうマニュアル化した教育がロボットやAIによって代替される可能性がある。未来の学校はどうなり、そこで教師は何をしているか想像して見てほしい。

言葉が分からないからこそ、彼らへの介入は慎重になる必要がある。彼らの言葉の理解を考えながら調整しながら教育を進めていくことが、未来の特別支援教育の専門性の1つとして求められていくであろう。魔法のプロジェクトは子供を支援するだけでなく、教育の課題と本質を議論し、先生たちにも新しい空気を送り込み続けるプロジェクトであるべきだと考える。